

# 「懲罰」の時代のただ中でホームレスの地理を位置づけ直す ——ホームレスの地理は崩壊しているのではない、複雑なのだ——

ジェフリー・ドウヴェルトウイユ\*, ジョン・メイ\*\*,  
ユルゲン・フォンマース\*\*\*  
(松尾 卓磨\*\*\*\* 訳)

Geoffrey DeVerteuil, Jon May and Jürgen von Mahs  
Complexity not Collapse:

Recasting the Geographies of Homelessness in a 'Punitive' Age

Progress in Human Geography 33 (5), pp. 646-666, 2009.  
Copyright © 2009 by SAGE Publications

Reprinted by Permission of SAGE Publications, Ltd.

**要旨:** 過去10年のあいだで地理学者によるホームレス研究が急増してきた。その多くはホームレスと、ジェントリフィケーション・都市の再編成・公共空間のポリティクスといった広範なテーマを接合させようという意向のもとで枠づけがなされてきた。そして、それらの諸研究はホームレスに関する議論を主流の地理学的研究に持ち込むことに寄与してきた。しかし一方で、そのほとんどがアメリカ製の知的尺度の内に留まっており、近年の都市社会政策における厳罰化傾向にばかり目を向けてしまっている。そもそも政策には懲罰的なものだけではなく、多面的で懲罰性と受容性の両方を兼ね備えた政策も存在している。こうしたよりの確な理解に依って考えると、近年の諸政策のもとでホームレスの地理はますます多様化していることがわかる。本稿ではこのホームレスの地理の多様性を把握するために1つの枠組みを提示し、それを前進させる。

**キーワード:** ホームレス、ポバティ・マネジメント、懲罰的都市政策、報復主義、サードセクター

## 第1章 導入

ロイス・タカハシ Lois Takahashi (1996) が地理学的観点からホームレス研究をレビューしたのはおよそ10年前のことである。彼女は新たに確認されたホームレス（女性や子ども、エスニック・マイノリティ出身のホームレスが増加し、高齢男性の路上ホームレスという従来の身分に加わりつつあった）について詳述することから始め、その急増の原因を検討した。そして、1980年代後半から1990年代初頭にかけてホームレスの危機 the homelessness crisisが生じたのだが、それに対して実施された地理的に多様な対応についてレビューを行っている。また彼女は、ホームレス状況やホームレスの人々に関する表象にあまり言及がなされていない点を指摘し、そうした（おおかたが否定的な）表象が拒絶のポリティクス politics of rejectionの生成過程を理解する上で非常に重要であると述べている (Takahashi, 1997を参照)。彼女はそこで、密接に関連する3つのスティグマ（ワケアリ、非生産的、危険／予測不可能）を挙げ、ホームレスはそうしたスティグマを付与された有害空間に存在する人が多いという

ことを主張した。しかし重要なこととして彼女は、ホームレスが常にそのような在り方をするわけではないということも認識している。例えばある集団（女性や子どもなど）は政策立案者や“家がある人々 housed public”の一部から嫌悪感を抱かれることもあるが、一方で同情を生む可能性も高いのである。このようにタカハシは、ホームレスがスティグマを付与された多様な「空間」を占めていることを示唆した上で、そうしたスティグマに異議を唱えるためにも「表象の場 sites of representation」を研究対象とすることを地理学者に求めた。というのも、この「表象の場」がホームレス状況やホームレスの人々に対する認識に大きな影響を与えるからである。

本稿の目的の1つは、タカハシが行ったホームレスに関する地理学的研究のレビューを21世紀的文脈にまで押し広げることである。そのためにわれわれは、未だに増加の一途をたどるホームレス研究に注目し、その主要な研究領域を確認する。先述のとおりタカハシは、ホームレスに関する既存の表象に異議を唱える研究を求めていた。本稿でのレビューはタカハシのその要望を進展させたいという想いによってかたちづくられている。われわれは、地理学

\* School of Geography, Highfield Campus, University of Southampton, Southampton SO17 1BJ, UK

\*\* Department of Geography, Queen Mary, University of London, Mile End Road, London E1 4NS, UK

\*\*\* Eugene Lang College, The New School for Liberal Arts, 66 West 12th Street, Room 904, New York, NY 10011, USA

\*\*\*\* 大阪市立大学文学研究科 院生

的研究におけるホームレスについての主要な表象手法を批判的に検討することを通じて、彼女の要望を実行・実現したい。

ホームレスに関する地理学的研究——その大多数はアメリカで発表されたもの——は、1990年代中葉以降、厳罰的措置と法令遵守が本格的に強化されてゆく最中にかたちづくられてきた。具体的には、ホームレスが生存をかけてなす行為（例えば残飯をあさる、物乞いをする）を罪に問ひ、また都市の主要地域（公園、鉄道駅、路上など）からホームレスを一掃するという方策によって、ホームレス空間の急速な“崩壊”が進行していた時代である。ホームレスを圧迫し、彼／彼女らの公共空間へのアクセスおよび「都市への権利」を制限する懲罰的措置は、直近の10年間で確実に広がりを見せている。われわれはこの事実を否定はしないが、次のことも指摘しておきたい。「崩壊」という言葉のみでホームレスの地理を定式化するということは、現代都市を特徴づけている、ますます多様化し複雑化するホームレスの地理に目を覆ってしまうということなのだ。

こうしたことを踏まえわれわれはまず懲罰論的転回 *punitive turn* というよく知られた考え方を再検討することから始める（第II章）。そこでは「監獄都市」、「報復都市」、「ポスト正義の都市」と都市の捉え方を時系列的に大まかに区分し、これらそれぞれに重複している傾向を確認する。続く第III・IV章では、ホームレス問題への今日の対応のこれまでにない概念化——ポパティ・マネジメント——について紹介する。このポパティ・マネジメントという考え方はホームレス空間が崩壊しているという単純な見方はとらず、都市におけるホームレス空間の増大を明らかにし、また、ホームレス空間の形成過程に関する微妙な差異を含んだ把握の仕方を提示するものでもある。第V章では、われわれが担った責務、すなわち広範なホームレスの地理について検討する——アメリカだけでなくそれ以外の国や地域におけるホームレス問題への様々な対応を確認する——という務めを果たしたい。そしてホームレスへの地理的に多様な対応を概念化する1つの枠組みを提示する。最終章では、スティグマの連続性とスティグマが付与された空間に注目したタカハシの視角に立ち返る。これはホームレスの地理の多様性に関して、その多様性の異なる側面を描き出すことを目的としており、そのためにホームレスの人々それぞれが有する極めて多様な経験を調査・分析した既往研究をレビューする。

## 第II章 ホームレスに関する懲罰論的枠づけ

本章ではホームレスに関する3つの懲罰論的枠づけをとり上げ、それらに共通する傾向を確認し、そしてその傾向がホームレスの人々と彼／彼女らの地理への理解に強く影響を与えるようになった背景について述べる。都市の捉え方——監獄都市、報復都市、ポスト正義の都市——にみられるそれぞれの傾向は、いずれも20世紀後半にアメリカの都市で生じた社会経済的変動を認知し批評することに端を発する。1980年代以降、貧困層への反発が都市政策の内容にも反映されるようになったが、上記の都市の捉え方はそうした反発を識別する際のリトマス試験紙としてホームレス（とりわけホームレス政策）を位置づけている（DeVerteuil, 2006）。ここで言う傾向とはホームレスに対する懲罰的措置の増殖（傍点強調は著者による。以下同様。）を指しており、この増殖は早くも1990年代半ばには「悪意のある無関心 *malign neglect*」、封じ込め、集約化を伴いながら始動していた。そしてこの増殖は、ホームレスの人々を容赦なく縮小された（公共）空間へと追いやり反ホームレス法の犠牲者へと陥れる積極的介入、さらにはスキッド・ロウ *Skid Rows* の崩壊や路上での立ち退きなどにまで至っている。

### 1. 監獄都市 The carceral city

ホームレス状況に関する懲罰論的枠づけのおおかたがマイク・デイヴィス *Mike Davis* の『要塞都市 *LA*』（1990）の第4章から着想を得ている。当書においてデイヴィスは以下の事柄を明らかにし考察を加えた。「要塞都市 *LA*」では、犯罪・無秩序・「よそも」への恐怖が、共通する都市文化の欠如や社会経済的不平等の拡大と結びつくことによって、建造環境を要塞空間（飛び地 *enclave*、監獄空間 *carceral space*、「立入禁止」区域）のモザイクへと変容させていた。彼はロサンゼルスを実例として、縮小するスキッド・ロウで実施されたホームレスの一斉拘束（*Davis, 1990: 232-236*）、近隣ダウンタウン地区におけるホームレス排除の増加——取締りや都市景観そのものの強化（「浮浪者よけ」ベンチ、スプリンクラーシステムなど；*p.233*）といった手段によって実施された——、これらについて詳細に記述している。またデイヴィスは次のようにも述べている。取締りや排除の根拠となる諸政策によって「ホームレスの大多数は都会の流浪の民となった…〔彼／彼女らは〕常に追われる身であり、絶えず移動し、封じ込めという公的政策とダウンタウンの街並

みのサディズムとの間で押しつぶされているのだ」(p.236: 200. 補足は訳者による)。

デイヴィスの論考は広く受け入れられたが、一方でホームレスの地理を軽視する要因ともなり、それは都市地理学者の想像力を捉えて止まないホームレスに対する「悪意のある無関心」を惹起するものでもあった。ホームレスの地理が厳しく封じ込まれつつある、という感覚はロサンゼルスでの事例から生じたものである。にもかかわらず、至るところで左派地理学者や「反ユートピア主義的都市研究者」(Merrifield, 2000)を魅了し、またそうした感覚によって、北米や西欧諸都市の明らかに似通ったホームレス対策を対象とする研究が数多く生み出されたのである(Hoch, 1991; Sorkin, 1992; Zukin, 1995; Wolch, 1997; Metraux, 1999; Katz 2001を参照)。

## 2. 報復都市 The revanchist city

ロサンゼルスから2,500マイル離れたニューヨークにおいても封じ込めを取り立てて強調する主張が現われ始めていた。1990年代初頭の深刻な景気後退、揺らぎ始めたジェントリフィケーション、そして路上犯罪・物乞い・浮浪に対する世論の反発を引き合いに出しながら、ニール・スミス Neil Smith (1996a) は都市政策における判然たる転換を把握し、それを「報復主義」として特徴づけた。本質的にこの報復主義とは路上犯罪者、マイノリティ、貧困層、そしてホームレスから(白人)高所得者層が都市の主要な空間(鉄道駅、公園、沿道など)を報復的に奪還するということを意味している。報復都市に関する研究を経験的に補完するものの多くは、1980年代後半から1990年代初頭にホームレスに対して実施された大規模な懲罰的措置を事例としている。具体的には「路上窓拭き人 squeegee men」の撲滅、ビジネス改善地区(BIDs)の拡大、公共空間での厳しい取締り、そしてトンプキンズ・スクエア、ペンシルベニア駅、タイムズ・スクエアといった主要な空間でのホームレスのテントの解体などが対象とされてきた(Smith, 1992; Cresswell, 1996; Passaro, 1996; Dordick, 1997; Duneier, 1999を参照)。

ロサンゼルス——封じ込めが重要視され続けた——とは異なり、ニューヨークでのホームレス対策は明らかに介入主義的であった。というのも、ニューヨークでの対策には都市ホームレスの路上生活を極力困難にすべく設計された「クオリティ・オブ・ライフ」や「反キャンプ」条例の施行が含まれていたからである(Smith, 1996a; 1996b; 1998)。また、ロサンゼルスにおけるホームレスとの闘争は主とし

てローカルビジネスとコミュニティ再開発局(CRA: Community Redevelopment Agency)によって牽引されていたが、一方のニューヨークの場合はより多くの支持を得たいというジュリアーニ Giuliani市長の思惑もあって、(ホームレス以外の)都市居住者の利益を勝ち取るための闘争として反「ホームレス」闘争が表象された。そのため取締りの強化に並行するかたちで次のような強烈的なメディアキャンペーンが展開された。まず、ニューヨーク市にはホームレスたちが利用可能なサービスがある、ということ“家がある人々”に想起させ、そうしたサービスを路上のホームレスには提供しないということを力説した。そして、“ホームレスの利益を最大化する”ために苦し紛れに建設された今では老朽化してしまっている避寒シェルター(それがなければ保護収容施設)へのホームレスの強制的入居を合法化しようと努めたのである(Smith, 1996a: 226. Mathieu, 1993を参照)。ニューヨーク市のリベラルの伝統を思い起こすと、都市政策におけるこのような転換は深刻であるとも、またかなり動揺を招くものであるとも考えられる——スミスの言葉を借りると、この転換は「政治的リーダーや企業幹部といった協同して支配階級を構成する限られた集団」による「選択」であった(Smith, 1998: 16)。

## 3. ポスト正義の都市 The post-justice city

デイヴィスの著作にもあるように都市報復主義という見方は当初の文脈から飛躍し、西側諸国の多くの都市で一般化しているホームレスに対する懲罰的措置の厳格化、そしてそれに関連する都市政策を描き出すための視角として現出した(「報復主義」的都市政策に関してはDangschat, 1997; Arapoglou, 2004; Coleman, 2004; Slater, 2004; Wylie and Hammel, 2005; Herbert and Brown, 2006、報復主義的都市政策の転移に関してはSmith, 2001; Swanson, 2007、概念とその展開に関する批判的分析についてはMacLeod, 2002; Brenner, 2004a; Hubbard, 2004; Uitermak and Duyvendak, 2008をそれぞれ参照)。つまるところ、この類の研究は1990年代半ばから後半にかけての特定のホームレス状況を描写するようになったのである。ジェントリフィケーションと再開発がスキッド・ロウという周縁空間にさえも侵犯し始めたとき、取締りの増強、主要な空間からホームレスを一掃するための反ホームレス関連法の増加が確認されたこともあり、ホームレスの地理は「崩壊している」と見なされた。

ドン・ミッチェル Don Mitchell (1997: 311) は、

こうした(再)規制や公共空間での立ち退きは「ホームレスの人々を一人残らず消し去り」、彼／彼女らの地理を壊滅させることに他ならないと考えた。つまり彼は(再)規制や立ち退きを、「ホームレスには居場所がないということを根拠に、すべての人の安寧を保証しないことが正当化される世界を創り出す」(強調は著者による)手段として捉えたのである。ミッチェルにしてみれば近年展開されている措置は報復主義の次元を超えており、彼が「ポスト正義の都市」(2001: 81)と呼ぶものへ向かう動きを示している。この「ポスト正義の都市」とは「もはや社会的正義の実現を目的とした闘争によって定義されるのではなく… [むしろ]ホームレスを壊滅させる“ベスト”な手段への疑問の投げかけによって定義される」都市を意味している。

ミッチェルはスミス(1992; 1996b)を参照しながらも、こうした潮流の中で発表された初期の研究を少なくとも3つの方向性に拡張させている。まず第一に、路上からホームレスを排除する行為に関して、デイヴィス(1990)とスミス(1996a)はそれが主としてローカルビジネスとディベロッパの要請を受けて実施されるものだと考えたが、ミッチェルはより大きなロジックに対応するものとして考えた。彼はローカルビジネスやディベロッパらによるキャンペーンに明白なスケールのポリティクス *scalar politics* の痕跡を見出した。また、激しい都市間競争の時代に突入したことにより、都市管理者らは都市のイメージを強化——国際資本によって需要される(魅力的で「暮らしに適した」都市景観といった)ローカルな環境を確保——しようとするようになり、それが都市管理者のあいだで新しい関心事となっていた。ミッチェルは路上からホームレスを排除しようとする考えを都市管理者らの関心の中心的要素として位置づけている(Mitchell, 2003: 163-167, Mair, 1986を参照)。第二に、ミッチェルは反ホームレス法についてのスミスの分析を敷衍し、反ホームレス法の遍在性——リベラルの砦であるサンフランシスコさえも含むアメリカ中の都市で反ホームレス関連法が採択された——を検討した。そして、ホームレスの人々の「都市への権利」や市民権に対する諸法令の影響を酷評している(Mitchell, 1997; 1998a; 1998b; 2001; 2003; 2005)。第三に、デイヴィスとスミスとは対照的にミッチェルはホームレス問題に取り組む地域福祉団体の役割に注目した。一例としてサンフランシスコの「マトリックス・プログラム *Matrix Program*」(サンフランシスコ市によって設立された活動的な「アウトリーチ型」プ

ログラム。サードセクターが提供するシェルターへ路上のホームレスを移動させるように制度設計がなされている)には、路上からの立ち退きの合法化や支援を「拒否する」ホームレスの断罪といった見え透いた(かつその大部分が失敗に終わる)思惑が見受けられたのだが、そうした思惑や意向にもミッチェルは着目している(Mitchell, 2003: 180-181)。

彼はホームレスを対象とした考察だけでなく、法律の地理的側面や公共空間・都市への権利などに関する幅広い議論を組み立てていたため、そうした彼の功績が大きな影響力をもっていたことは間違いない(Fitzpatrick, 2001; Lee and Farrell, 2003; Blomley, 2006; 2007a; 2007b; Cowan, 2006; Cameron, 2007; Staeheli and Mitchell, 2007を参照)。このことは、彼が提示したポスト正義の都市——そして、公共空間を取締まる法律を扱う際にそれを強調すること——が、近年増大している地理学者によるホームレス研究において研究フレームの定石となっていることから裏付けられる(Law, 2001; Brinegar, 2003; Collins and Blomley, 2003; Lees, 2005; Laurenson and Collins, 2006; 2007; DelCasi and Jocoy, 2008を参照)。また2007年のAAG(The Association of American Geographers)の年次会合においても、権利・空間・ホームレスをテーマとした特別セッションが設けられた(Blomley and Klodawsky, 2007a; 2007b; 2007c)。

### 第三章 懲罰論的枠組みを超える?

ここ数年の間で、ホームレスの人々を、そして彼／彼女らによる公共空間の利用を圧迫する懲罰的措置が増大していることは否定できない事実である。また、アメリカでの懲罰的措置の増大に歩を合わせるかのように、過去10年の間でイギリス(反社会運動体制、公然飲酒排除区域、タウン・センター・パートナーシップ *Town Centre Partnerships*) (Coleman, 2004; Johnsen and Fitzpatrick, 2007)や他の地域(Laurenson and Collins, 2006)においても新しい戦略が確認されており、現在ではそうした戦略が路上ホームレスの行動を制限するための手段となっている。この点に着目する懲罰論的枠組みは今やディシプリンにおけるホームレス研究に最も影響力を持つものとなっているが、しかしこの懲罰論的枠づけに対しては少なくとも次の3つの疑問を投げかけなければならない。

1つ目の疑問は、だれが「ホームレス」なのかとい

うことである。懲罰論的枠組みに立脚する研究者は、ホームレス状況の多面的解釈、ホームレスの権利を抑えつけるための計画、そして——頻度は少ないが——懲罰的措置の厳格化に抵抗しようという意欲、これらについて言及することはある。しかし一方で、ホームレスの人々自身や、厳格化された措置がホームレス各人にどのように影響しうるかということに関してはほとんど何も語っていない。事実、懲罰論的枠組みに立脚している研究者のホームレスに対するイメージは、メディアで繰り返し報じられるホームレス像と必ずと言っていいほど似通っている。なぜならば、(彼/彼女らが頼りにする)報道でとり上げられるホームレスの経験のほとんどが路上の男性ホームレスによる経験であるからだ (May, 2003)。普遍的なホームレス像の構築に対する異なった解釈については DelCasino and Jocoy, 2008 を参照)。

しかしながら、実際のところホームレスの人々が極めて異種混血的であるということは周知の事実である。ある人が他の誰かよりもホームレスになりやすいように、ホームレスの経験の多く——ひとりひとりのホームレスが、立ち退きの対象となった路上ホームレスの数 (シェルターに入っている人数よりははるかに少数) に入りやすいかどうかとも考慮する——も年齢やジェンダー、エスニシティによって大きな違いがある (von Mahs, 2005; May, 2008)。また、路上という要素1つをとってみてもホームレスの経験は男性と女性のあいだではっきりと異なり (May et al., 2007)、多数の路上ホームレスの中で形成される集団ごとでもホームレスの経験は異なっている (Johnsen et al., 2005a)。ここから浮かび上がるのは、われわれに求められるのはホームレス「そのもの」について語り続けることではないということである。むしろ必要であるのは、現代都市で見られる多様なホームレス状況、同じく極めて多種多様なホームレスの経験、この両者への微妙な差異を含んだ緻密な理解を押し進めることである。

2つ目の疑問は、ホームレスの地理は本当にどこでも同じなのかということだ。ブレナー Brenner (2004b) は都市研究で見られる典型的思考を批判し、それを退歩的傾向だとみなした。同じようにわれわれは、ホームレス状況の解釈に際して懲罰論的枠組みを採用することにこの退歩的傾向を見出すことができる。懲罰論的枠組みがヘザーリントン Hetherrington (2001) の言うホームレス研究での「常套手段」となり、そうした数々の事例の性急な同定が他の様々なホームレスへの対応を覆い隠すこ

とにつながっている。これは、懲罰論的枠組みによってではホームレス対策の複雑性を把握しえない都市においてさえも実践されているのである (Laurenson and Collins, 2006)。世界では都市間競争が激化しており、一国の政策が即座に他国・他地域へと輸出されることはもはや珍しいことではない。そのため、西側諸国のいくつかの都市でホームレス対策が似通っていたり、懲罰的措置が同じように採用されていることはまったく驚くようなことではない (この領域や関連分野における政策の転移については Hubbard, 2004 を参照)。以上のことを踏まえると、類似する事例ばかりを対象とし記録するよりは、ホームレス問題が場所によって異なった様相を呈する理由、そしてそれへの対応が異なっている理由を理解しようとするの方がより有益だと考えることができる。

3つ目の疑問はこうだ。路上からホームレスの人々を追い払ってきたのはだれなのか？ 追い払われたホームレスはいったいどこへ行ったのだろうか？ 懲罰論的枠組みに依拠する研究は封じ込めや管理を受ける対象というよりは、むしろそれらを行う主体に着点を見出してきた。そうであるにもかかわらず、研究者たちはホームレス政策における近年の転換、すなわち懲罰的措置の厳格化の責任はだれにあるのか、この問いに対して曖昧な答えしか示すことができていない。ほとんどの場合、その責任の所在は「地方自治体」に求められる。なぜなら「地方自治体」は従順なメディアと警察組織の協力を得ながら、ローカルビジネスやディベロッパ、国際資本」の利益のためにホームレスの立ち退きを企図しているように思われていたからである (Smith, 1992; 1996b; Mitchell, 1997 を参照)。しかし、こうした見方は資本とりわけ自治体の資本に対する理解、そして資本・自治体・その他の主体間の相互関係に対する認識がともに不十分であることを示している。そのためわれわれは下記の各種緊張関係に着目し、「自治体」(Peck, 2001) の理論化を切り開く必要性について説きたい。その緊張関係とは、地方自治体内の異なる組織間に存在する緊張関係 (例えば「再開発」諸機関と社会サービス関連諸局はそれぞれ異なる指針に導かれている可能性がある)、そして地方自治体と地域自治体 (または連邦政府) 間の緊張関係であり、言うまでもなくホームレス問題への対応に関わる様々な主体と自治体との緊張関係も含んでいる。また、ここで言うホームレス問題に取り組む主体とは企業関係者や警察組織だけを指しているのではない。(特に)北米・西欧・南洋州の諸都市

で確認されているホームレス向けサービスの明け渡し、これを牽引したサードセクターにも注視しなければならない (von Mahs, 2005; DeVerteuil, 2006; Laurenson and Collins, 2006; May et al, 2006)。多くの事例では、従来認識されていたものよりもはるかに受容性が高いホームレス対策、もしくはは少なからぬ受容性を備えたホームレス対策を看取することが可能である。その理由としては次の2つが考えられる。1つは、自治体が実際のところ資本に従属するばかりではないということである。そしてもう1つは——都市成長の連合をとり上げた初期の研究で明示されたように (Leitner, 1992) ——ホームレス政策の展開に見られる連合は懲罰論的研究で示されるものよりも多様(かつ不安定)であるということが挙げられる。それゆえに、そうした多様性がホームレスへの様々な政策的対応へとつながり、時に同じ場所であっても異なる方向性をもつような事態が生じるのである。

ホームレス対策のこうした多様性が一度でも理解されると (Law, 2001を参照)、ホームレスの地理は崩壊からはかけ離れてむしろ拡大する。そこでより強調されるべきなのは、ホームレスの人々の公共空間へのアクセスにどういった制限が課せられているのかということではなく、彼/彼女らの大多数が多くの時間を過ごす空間(シェルター、避難所、刑務所、ドロップインセンター drop-in center、間借り下宿 rooming house)の種類や構成を調査することである。ホームレスの人々が「いなくなっている」(Smith 1998: 5を参照)のはそうした空間に流入しているからなのである。つまり、都市のホームレス空間は崩壊しているわけではなく、過去10年ほどの間でその基礎部分は拡大しかつ細分化が進んでいるのだ。

続くIVからVIの各章では単なる批判を克服し、それぞれのテーマについて詳しく検討している。第IV章では、ホームレスに対する近年の対応手段のもうひとつの概念化——ポバティ・マネジメント——を対象とし、この考え方が明示する複雑かつ多様なホームレスの地理学の輪郭を描き出す。第V章でそのホームレスの地理学を深化させる。そして、ホームレスとそれへの対応が場所によって異なることに十分留意し、その多様な性質・程度・範囲を概念化するのに必要となる新しい枠組みを紹介する。さらに、地理学者によるアメリカと他国の都市を対象とした近年のホームレス研究をレビューする。第VI章ではホームレスの異種混濁性に関する問いに立ち返り、第V章でレビューしたものと異なる側面に照

射した地理学的研究を確認する。つまり、ホームレスの人々に見受けられる微妙な差異を丁寧に汲み取って記述し、彼/彼女ら自身の都市での経験——懲罰的都市政策・制度への反応も含む——に関して何らかの論及を試みている研究例をいくつか紹介する。

#### 第IV章 ホームレス対策の再概念化：封じ込め、管理——そして、ケア？

本章では近年のホームレス状況に対する懲罰性・受容性の両方を兼ね備えた社会政策について考察する。そしてさらに、ホームレス問題に対処する都市政策においては懲罰的措置の厳格化が一心に押し進められているのだが、そうした流れに従うことが必ずしも適切ではないことを示唆する、受容性の高い対応についても検証の対象とする。われわれが目にするのは、自治体がどのように「ホームレス」を封じ込め、管理しようとしてきのかということだけではない。自治体や他の主体はホームレスの人々へ「ケア」を施そうともしていることから、その「ケア」の手法も検討の対象とする——後述するように、そうした「ケア」と「管理」の明確な境界を判定することには常に困難が伴う (Piven and Cloward, 1993)。

ホームレスへの多様な対応の仕方を概念化する方法の1つにポバティ・マネジメントという考え方がある (Wolch and DeVerteuil, 2001; DeVerteuil, 2003; 2006)。この「ポバティ・マネジメント」は公共都市、都市経営者主義、統治性、アベイアンス理論 abeyance theory、ケアの景観などといった概念や考え方を参考としている。また、いわゆる“社会の規律を乱す人たち”によって負の外部効果費用が生み出されるのだが、その費用を規制・管理するための空間的/時間的構造がいくつか設計されている。「ポバティ・マネジメント」はその空間的/時間的構造の創造にも関係している。自治体は——他の機関やエリートたちと協同して——このポバティ・マネジメントという枠組みに基づき特定の貧困管理技術を普及させており、支援型(低廉住宅など)から懲罰性と受容性を併せ持ったタイプ(サードセクターへのホームレス事業運営許可)、そして懲罰的措置(反ホームレス法など)に至るまでその範囲は広がっている。これらの手法は時間をかけて徐々に——19世紀の保護施設から現代のシェルターに至るまで——特定の次元のマネジメントへと変化してきたものである。1980年代、アメリカの改良さ

れつつある都市の中心部ではホームレスの急激な増加が始まっていた。ホームレスの急増（それは社会的コントロールの危機 *crisis of social control* という言葉で捉えられた）に対する反発は不可避のものとなり、そうした事態が後にポパティ・マネジメントという新しいレジームの進展につながっていった (Wolch and DeVerteuil, 2001)。

この新たなレジームの目的は、「[シェルターとその他のサービスに対する] 世論の反発と…浮浪者取締法の地盤を固めること」、そしてより重要な「ホームレスの再施設化と循環」、これらを実現させることによって目に見えるホームレスの数を減らしてゆくことであった (DeVerteuil, 2006: 119)。結果的には、アメリカの大都市のホームレスはますます制約がかけられた主要な公共空間に行き場を見出さざるを得なくなっているのだが、なじみがなく、偶然出くわした、非公式で、不適当な施設——シェルターやSROホテルだけでなく、刑務所、拘置所、病院、更生施設、リカバリーホームも含む——を常に転々としている姿がこれまで以上に見かけられるようになった (DeVerteuil, 2003)。こうしたホームレスの再施設化と循環には、従来のホームレスの地理をより複雑化させる働きがある。そのため実際には崩壊などとは程遠く、ここ数年ホームレス空間は急増しているのだ。つまり留保の場として機能し、全体像が不明瞭でありながらも諸施策のすき間を埋め合わせる構造のかなりの拡大が確認されており、こうした構造がホームレスの人々を受け入れ、支援している (Laws, 1992; Williams, 1996; Knowles, 2000; Burt et al., 2001; Datta, 2005; Lobao and Murray, 2005)。

ドゥヴェルトウイユ DeVerteuil (2006) は1990年代後半のロサンゼルス市のシェルターシステムを事例とし、ホームレスが利用可能なシェルターのベッド数はまったく減少しておらず、むしろ実際は増加していた——ダウンタウン(スキッド・ロウ)中心部の一角で局地的にベッド数が確保されていたためである——ことを明らかにした。同様にイギリスにおいてもここ数年緊急シェルターの数——95%はサードセクターによって供給されており、そのサードセクターは地方自治体・中央政府の資金と公的寄付によって下支えされている——が劇的に増加してきたのだが、それはちょうどホームレスの人々への同情が明らかに失われつつある時期でもあった (May et al., 2006)。

緊急シェルターの供給量の増加は必ずしも封じ込めや管理の論理と一致するわけではない。確かに地

方自治体にとっては公的資金の支出や政治家のイメージに関わるコストを最小限に抑えられることもあり、路上からホームレスを移動させる——ホームレス問題を見えにくくする——手段としてシェルターは有効であるのかもしれない。ただ、そうであったとしても、緊急ベッドの設置はホームレスを単に「根絶する」こと以上に地方自治体に複雑な対応を求めることにつながっている。

こうしたシェルターの大多数は（炊き出しやドロップインセンターといった他のサービスと同様に）サードセクターによって供給されている。サードセクターのような組織が地方自治体・中央政府の資金を頼りにしていることは先にも述べたが、サービスを提供するための資金繰りや人件費においても多大なる公的寄付によって支えられている。そうした状況下で提供されるサービスが近年増加しているということは、つまり、ホームレスの人々の前に「報復心 *revenge*」なるものが立ちはだかつたとしても、それだけが世論を支配しているわけではないということの意味している。そこでわれわれは報復心とは一線を画す、深く根差しかつ未だに力強さを保つ「施しの精神 *feelings of charity*」に焦点を当てたい。この精神はわれわれが「ケアへの衝動 *urge to care*」 (May, 2008) として考えてきたものであり、アメリカにおいてもはっきりと確認されている (Link et al., 1995)。「ケアへの衝動」は、ホームレスへのサービスのために時間と労力を捧げ続ける何万ものボランティアの尽力に最もはっきりと見て取ることができるだろう。しかしそうした局面だけではなく、大西洋の両岸で「寄付先を迂回させるスキーム」が悉く失敗していることにもその衝動の作用を見出すことができる。例えば、「路上生活」に対して直接寄付を施すことは好ましいことではない、といった政治家や政策立案者の抗議があるにもかかわらず、一般大衆は（地域ではなく）路上のホームレスへ寄付をしている (Dean, 1999)。

ホームレスへサービスを提供する空間、すなわちサービス空間の最適概念化に対し評価を下すにはその空間自体を詳しく理解する必要があるのだが、地理学者や他の研究者はそれに著しく遅れをとってきた。数少ないわれわれの研究から浮かび上がる実態は実に多様である。疑いようもなくサードセクターの多くは最も基本的な施設の供給だけを続けており、多くのシェルターにはわずかばかりの快適性と安全性しか備えられていない。環境の劣悪さが目立つことに加え、シェルター内には多数の制約（早朝に退出、夜間は外出禁止、アルコールの全面禁止

など)が存在するためホームレスの中には路上での生活を選択する者もいる。またそうした特徴の空間には暴力がつきもので、そのリスクを負った上でさらにシェルターのスタッフの管理に従属するということには耐えられないのである(May et al., 2007を参照)。

他方、ウィリアムスWilliams (1996) は次のことを指摘している。「高水準の支援」を提供する多くのシェルターではひどく押しつけがましい個人向けサービス事業が機能している。そしてこうした状況には、「対処や改善が必要な「問題」は貧困や失業、低所得層向け住宅の不足などではなくホームレスの人々である」とする専門的サービスサービスの考え方が如実に表れている、と(Williams, 1996: 75) (同様の主張としてVeness, 1994; Fopp, 2002; DeVerteuil, 2004を参照)。彼はこのような事業の存在を踏まえて問われるべきであるのは、今日のホームレス状況への接近がホームレスの人々を管理するののか、それともケアをしようとするのか、このいずれの意向によって特徴づけられるのかということではないと主張した。そうではなく彼は、どの程度の福祉の提供が受給者に対し管理されている感覚を与えるのかということに問うべきだと主張している。また、より一層基礎的なサービス、そしてウィリアムス(1996)によって見出されたものに近似するサービス、これら両方に目をつけた研究者もいる。そこで目を向けられたシェルターでは(利用したい人にとって)良質な設備、安定的宿泊の保障、高水準の支援が提供されていたが、全く同じ都市であるにもかかわらず、ウィリアムスが報告したような個人向けの押しつけがましいマネジメント事業は存在していなかった(May et al., 2006)。

以上から次のことが明らかとなる。ホームレスの人々にとって重要な自治体が提供する福祉(特に低廉住宅事業)は縮小しつつあるが、一方でシェルター、ドロップインセンター、炊き出しといった応急サービスの提供は多くの都市で拡大している(Johnsen et al., 2005a; 2005b; May et al., 2006)。そうしたサービスの提供は受容の第一歩となるだろうが、緊急シェルターやドロップインセンターはホームレス状態への解決策を用意するわけではなく、またとてもではないが「応急処置」にも封じ込めのための道具にさえもならない。そのようなサービスを提供する多くのサードセクターは、現在では(例えば中間施設や借家支援事業といった)二度と路上に戻らなくて済むための踏み台を提供している。またサードセクターによる支援の仕方が違っていたと

しても、関係者はみなホームレスを救いたいという切実な想いに突き動かされている(MacLeod, 2002; Cloke et al., 2005; 2007a)。はっきりとしているのはサービスの種類や質、供給が地理的に著しく不均等だということである。この点から考えると、より一般的にサードセクターというのはボランティア活動の不均等な地理を映し出していることになる(Milligan and Fyfe, 2004; Wolch, 2008)。また他の奉仕活動と同様に、サードセクターがホームレス問題の長期的解決に貢献できるかどうかは既存の福祉システムにおける何らかの(例えば低廉住宅の)不足、もしくはアルコールリハビリ事業などによって左右される(May et al., 2006)。

ポバティ・マネジメントの考え方には、ホームレスへの明らかな懲罰的措置、懲罰性と受容性の両方を備える方策、明確な受容性を有する対応、これらの適正なバランスが空間(や時代)によってははっきりと変わりうるということが含意されている。またポバティ・マネジメントは、これまで述べてきたような様々な組織の存在、ホームレス対策の構築に責任を負う諸組織の意向、そしてある一ヶ所でのそうした組織間の力関係によって変化する。例えばメイほかMay et al. (2005) は以下のことを報告している。「ホームレス・アクション・プログラム Homelessness Action Programme」(1999-2002)には、路上ホームレス問題に対しより首尾一貫性が高い枠組みを用いて対処しようというイギリス政府の意向を見てとることができる。しかし、この意向によってもたらされた結果には広範な多様性が確認された。いくつもの都市では、中央政府が抛出する特別資金の獲得に熱心な自治体によって早急にこの事業が採用された。そして、自治体はサードセクターに圧力をかける手段を得たことを受けて、特定の事業——物乞いを弾圧し緊急ベッドの数を厳格に管理する、より活動的な「アウトリーチ型」事業——の中心的教義を守るために資金を抛出した。そうして中央政府からの資金を確保できた自治体もあるのかもしれない。しかしながら、同じ都市の中でも多くの他のボランティアセクター——とりわけホームレスへの路上サービスの提供、そしてそれらを支えるより多様な資金の流れ——は断固として「権力の外側」に留まっており、路上ホームレス問題に対してより効率的な(かつ厳格な)対策を講じようとする地方自治体の動きに歯止めをかけている。他の基礎自治体においてはホームレス・アクション・プログラムの申請が完全に控えられている。というのも、資金を申請するということは、都市のイメージを損なわしかね



ない問題の存在を「認める」ことを意味しており、基礎自治体はそれを懸念していたからである。申請しないことによってホームレス問題に対処する資源が少なくなったとしても、やはり基礎自治体は申請を控えた。結果的にそうした都市のサードセクターは資源を渴望し続けるが、一方でまた、自らの方針や行動(誰に、どういったかたちで支援するのかなど)を決定できる自由が他所のサードセクターよりもはるかに大きいと、その自由を存分に活用し続けている(Cloke et al., 2007b)。同じように多種多様なロサンゼルス郡でのホームレス対策についてはLaw, 2001を参照)。

懲罰論的枠組みに依拠して進められる研究のうち1つの明らかな欠点は、近年の対ホームレスキャンペーンを先導してきた考え方に明確な(通例、全面的にネガティブな)動機が存在すると考える傾向があることだ。しかしそうした動機の特定は必ずしも容易ではない。例えばアメリカやイギリス、その他の国々においては巨大企業や銀行によって緊急事業に毎年膨大な食料と資金が寄付されているが、それによって、「報復主義」的・「ポスト正義」的アプローチで言われていることと、今や多くの企業によって公然と唱導されている「社会的責任」や「企業市民意識」といったスローガンとが厳密にはどのように関わっているのかという論点が回避されている。多くのサービスにとってはそうした寄付の有無が死活問題であるのは確かであって、「路上」へのサービスよりも「路上の外」でのサービスに寄付をするという企業の手段と、水面下で影響力を持つという目的は一致するのかもしれない。しかし、だからと言ってホームレスの人々を「壊滅」させようという考え方と一致させることは困難である(Johnsen et al., 2005a; 2005b, Mitchell, 2001: 81を参照)。

報復都市／ポスト正義の都市に関する研究で検討される「反ホームレス」のための連合も、しばしば想定されるような強固な連合であるとは限らない。例えば、ロンドン議会(ロンドンの32の基礎自治体を代表している)で提案された路上での炊き出しを中止させる構想は、多くのサードセクターからの激しい抵抗を受けた後に撤廃された——社会サービス事業の他の側面を実行するために、基礎自治体の多くはサードセクターと協力し続けなければならなかったのだろう(Evans, 2007)。また、これらの連合への圧力は予期せぬ要素からも生じうる。ジョンセン&フィッツパトリック Johnsen and Fitzpatrick (2007)の報告によると、イギリスの基礎自治体の一部は街の中心で永遠に物乞いを続ける人々を対象

とした反社会的行動禁止令 Anti-Social Behaviour Ordersの数を増やすことができなかった。なぜなら、そうした禁止令が関係する個人のために分りやすく広く宣伝された支援パッケージに結びつけられていない限り、地方警察が反社会的行動禁止令の執行を拒否したからである。

ここまで述べてきたことは次のことを物語っている。すなわち、近年のホームレスへの対応は、懲罰論的枠組みがわれわれに信じ込ませようとしてきた内容よりもはるかに複雑で、はるかに多様であったということである。それゆえにわれわれが為すべきであるのは、公共空間の「浄化」や都市からのホームレスの人々の排除にばかり目を向けることではない。むしろわれわれには、現代都市においてますます複雑さを増し、時にちぐはぐなホームレスの地理を把握することが求められる。以下の章ではこの地理に関する議論を拡張させ、ホームレスへの対応が場所によって異なる理由についての的確に理解するための新しい枠組みを提示する。

## 第V章 アメリカ製の知的尺度から抜け出す：ホームレス状況が生み出されることとそれへの対応を理解するための新しい枠組み

懲罰的措置に依拠した記述によって与えられる印象がどうであれ、反ホームレス法の施行や路上掃討などの実施が広く普及している都市(とりわけ金融業、クリエイティブ産業、ツーリズム、コンベンション・トレードに大きく依存している都市)もあれば、そうではない都市もあるということは言うまでもない(Wyly and Hammel, 2005; May, 2008)。だからこそ、地理学者による近年のホームレス研究には失望せざるをえない部分があるのだ。それは、あたかもホームレス問題——そしてそれへの対応——がどこであっても無条件に同じであるかのように捉えられ研究が進められるからである。より正確に言えば、おそらくニューヨークもしくはロサンゼルスと同列に扱っているのだろう。しかし、既往の研究から明らかな通り、ホームレスへのアプローチの仕方において両都市は大きく異なっており、また異なるホームレスの地理を有している。ニューヨーク市はホームレスへの公的シェルターの提供が法的に義務づけられているアメリカでも数少ない都市の1つである(Gaber, 1996)。結果的には他の手段——例えば中間施設事業や定住低廉住宅事業——と相まって、路上ホームレスはロサンゼルス市よりも随分と

少ない(ただしロサンゼルス市は人口総数が少ない)(Inter-University Consortium Against Homelessness, 2007)。他方、ロサンゼルスではサンベルト地帯のほとんどの都市と同じように、都市域内で活動するサードセクターに対し最低限の公的資金のみを提供し、「間接的な援助、下請けへの委託、サービスの分散を内容とする無干渉主義システム、不十分な収容、(ローカルなシェルターシステム間の)低度の相互関係」(DeVerteuil, 2006: 112. 補足は訳者による)を生み出している。その結果としてシェルターのベッド数は根本的に不足し、ホームレス問題がより目に映りやすくなっている。

他の地域——特に他国——での展開をアメリカを事例に描かれた問題の輪郭(ロサンゼルスやニューヨーク市の事例を参照)と同じであるかのように捉えるこうした傾向は根が深いものであって、これには量の問題が関係しているのかもしれない。アメリカの地理学者によるホームレス研究を探し出すことは今のところ他より容易である。しかし、アメリカ以外を対象として研究が始められるときでさえ、アメリカ的——より正確には懲罰論的——基準に最も簡単に結び付けることができるホームレスの側面を見出し、それに焦点を当てるという傾向が未だに続いている。つまり研究は(他のホームレス集団よりは)路上ホームレスの経験に、(ホームレスの人々による他の空間の経験よりは)公共空間の経験に、そしてホームレス問題への受容性が高い対応よりは管理や封じ込めの問題に焦点を当ててきたのである。その結果的として、ニューヨークやロサンゼルスのホームレスの地理はアテネ(Arapoglou, 2004)、リヴァプール(Coleman, 2004)、ハンブルク(Dangschat, 1997)といったその他の都市のそれとほとんど同じであるという意図せざる印象を残している。

ホームレス問題とそれへの対応は場所によって異なる、と主張するためのもっともな根拠は確かに存在している。数少ない比較研究を参考としながら(Glasser, 1994; Marr, 1997; von Mahs, 2005; Minery and Greenhalgh, 2007を参照)、場所によって異なる理由の説明、比較研究の将来性を期待させる枠組み(初期の定式化についてはMay, 2004を参照)、これらを提示するためにもわれわれは懲罰論的枠組みへの批判に留まらずそれを乗り越えたい。われわれは西欧・北米・南洋州の多くの都市においてホームレス対策が収斂しつつあることを把握することができる。しかしこの収斂に、現代の西側諸国の都市におけるホームレス問題への単一の——普遍

的な——対応を見出すということは少なくとも4つの点から問題であると言わざるをえない。第一に、住宅市場と労働市場における変動に呼应して、そして特定の集団に著しくしわ寄せがいく国の福祉体制によってホームレス人口の規模と特徴が変化することは今や周知の事実である(Wolch, 1996)。(西側諸国の経済と福祉が広く新自由主義的であることもあって)上記の点における変化の流れは近年も持続しているが、しかしそうした再編は地域性に依存し、また経路依存的 path-dependentでもある(Larner, 2000; Harvey, 2005; von Mahs, 2005)。そのため、様々な方針が異なる場所で様々なホームレスの水準やあり方を生み出す傾向にある。

第二に、まさに貧困とホームレスを生み出すことに重大な影響を及ぼす(そしてホームレス人口の規模と性質を左右する)ように(Wacquant, 1999)、国の福祉体制はその地域でのホームレスへの対応を決定することにも影響力を持っている。この点について、例えば様々な国々における国家の福祉供給の質と程度を対象とし、その多様性を確認した研究もある——各国の福祉体制が「社会民主的」(スウェーデン、ノルウェー)、「保守的」(ドイツ、フランス)、「自由主義的」(アメリカ、イギリス)のどれに当てはまるのかを見定めている(Esping-Anderson, 1990; Daly, 1999; von Mahs, 2005)。そのおかげでわれわれは、幅広い福祉体制に異なるホームレスへの対応が存在していることを確認することが可能で、主流の福祉サービスによるホームレスへの支援やその支援を適用する集団に関して、ある国々(「リベラルな」アングロサクソン諸国)よりも一層寛容な国(「社会民主的」スカンジナビア諸国)があるということ把握することができる。

こうした見方は、新自由主義的再編の時代において西洋福祉諸国家に見られる収斂の程度に対して問題提起をする近年の諸研究に同調するものである。そしてまた、福祉供給に関して多くの西欧諸国ではアメリカの影響を受けたアプローチが生み出されているが、そうしたより限定的なアプローチに照射をする見方でもある(Alcock and Craig, 2001; Huber and Stephens, 2001)。しかしながら、近年では主流の福祉供給の性質が次々と、ホームレス問題に直接的に関係する政策的対応へ影響を与えているのかもしれない——福祉供給の性質によって、ホームレス問題への対応が広範で受容性が高い(緊急シェルターの供給増)のか、それともより懲罰的である(路上掃討や反ホームレス法)のかということが左右される。ホームレスへの対応はサービスの供給におけ

るサードセクターの役割によってますます複雑化しやすいく傾向にあり、また国や地域の文脈によってもさらなる多様性が付加されている。

第三に、ホームレスの文化的意味作用 *cultural signification* (ホームレス問題が認識されるか否か、認識されているのならどのように構築されるか) に見られる差異は、計量化が容易でないものの重要ではある。われわれは、様々な場所でのホームレス対策の形成に対してこの文化的意味作用の差異が果たす役割について指摘したい。この差異は地方や国家の次元もさることながら、地域の次元 (もしくは都市-田舎という境を越えて) でも十分その役割を果たす可能性がある (Cloke et al., 2000; 2007b)。第四に、ホームレスを生み出してしまうこととホームレスへの対応に関して数多くの地域特有の要素が及ぼす影響についても言及しなければならない。例えば、違法薬物の価格と入手の難易度 (近年イギリスでは、入手が非常に容易で低価格なヘロインが路上ホームレスの急増の中心的要因となっている; Neale, 2001) や都市の形態 (都市内で路上ホームレスの姿がどれだけ目に入ってくるかを定める; Snow and Mulcahy, 2001を参照) といった地域的要素を挙げることができる。

まさに地域特有の諸要素が相互に作用し合うからこそ、ホームレスへの対応をかたちづくる上で特定の手段をあらかじめ想定することが困難なのであり、またそれによってローカルな次元でのホームレスの対応においてより一層の多様性が育まれるのである。より目に入りやすい路上ホームレスの存在にはホームレスへの懲罰的対策を減じうる可能性もあれば、一方でそうした可視性が慈善寄付やサードセクターの活動を後押しする可能性も高い。(都市の形態もしくは大規模なシェルターシステムのいかんによって) ホームレスの姿があまり目に入らないためにホームレス問題が明るみとなりにくい場所では、他のサービス (ドロップインセンターや炊き出しなど) の展開の可能性がより低くなるかもしれない。

まとめると上記の4つの論点 (方針に依存した再編、多種多様な福祉体制、文化的意味作用の地域的差異、地域特有の諸要素) は、異なる場所でのホームレス状況の生み出され方・ホームレスへの対応、これらそれぞれの多様性について学者が調査を始める際に1つの枠組みを提示してくれる。また、微妙な差異を含んだホームレスの地理を展開させてゆく上でも依拠することが可能な枠組みである。ここからはこの枠組みについて、アメリカ以外でのホーム

レス問題を探究しているいくつかの簡潔な研究例を参照しその概要を描き出してゆく。

イギリスにはホームレス問題を含む (Cameron, 2007) アメリカのいくつかの社会政策の領域から露骨に、そして迅速に輸入された政策がある (Deacon, 2000; Peck, 2001)。最終的にはイギリス中の多くの町や都市で路上ホームレス問題に対する「アメリカ製」とも称しうる対策が採用されたのだが、そこにはビジネス改善地区の創設、物乞いを禁止する新法、反社会的行為禁止令による都市の重要地区からのホームレスの合法的排除などが含まれていた (Cameron, 2007)。アメリカで見られた動向とは若干異なるが、イギリス中央政府も(「ホームレス・アクション・プログラム」や直近のものとしてはシングル・ホームレス・レビュー *Single Homelessness Reviews*によって) 近年着々と路上ホームレス問題に対するより組織的な(そしてより活動的な)対応を発展させてきた。これにより、ホームレスの人々に提供されるサービスを慎重に制限し、「路上」から「路上の外」へのサービスへ移行させるという中央政府の圧力が、地方自治体および当該地域で活動するサードセクターへのしかかった。こうした状況でありながらも、他の研究者が既に明らかにしているように (MacLeod, 2002, May et al., 2005, 2006) ホームレス問題に対する受容性が高い対応を確認することは可能である。例えば先に触れた「ホームレス・アクション・プログラム」によって特にロンドン以外ではホームレスサービスの受給者のために運用可能な資金の大幅な増額が保証されている。より一般的にイギリスのホームレスの多くはアメリカのホームレスよりも福祉政策の他の領域を伴わせて様々な福祉サービスが利用可能な法的権利を享受している。そこには地方自治体からの (全てではないにしても) 大きな助成を受けられる——扶養児童を抱える世帯向けの——住宅を利用する権利などが含まれている。結果的にホームレス人口全体に占める路上ホームレスの数はアメリカよりも少なくなり、大多数のホームレスは路上ではなく (もしくは路上からの立ち退きに巻き込まれ)、その代わりにB&B (Bed-and-Breakfast hotel) /簡易宿泊所や避難所、シェルターで地方自治体によるより良い(新しい)住宅供給を待つようになっている (May, 2008)。

ニュージーランドでは、アメリカではなくイギリスのホームレス政策が参考とされているためか、そしてまたアメリカやイギリスの諸都市よりもホームレス問題を目に映りにくくする都市形態であるためなのか、ホームレスに対する非常に受容性が高い対

応が見受けられる。ニュージーランドにも反ホームレス政策（例えば多くの都市では近年の物乞いの増加が対象とされている）は存在しているが、各地方自治体は反ホームレス法ではなく、支援住宅や社会福祉事業への資金拠出によりホームレスの生活水準の向上をさせようと努めてきた（May, 2004; Laurenson and Collins, 2007）。

最後に示す事例からは、ホームレスの文化的意味作用に見られる地域的多様性によってもホームレス問題への対応に差異が生じていることがわかる。ソン Song (2006) が例証しているように、一瞥する限りではホームレスの「援助に値する」／「援助に値しない」という判断の基準は各国で同じように設定され、その判断に基づいてそれぞれのホームレス集団への対策が講じられているように思えるが、しかし実はその判断基準は大きく異なっているのかもしれない。ソウルでは（イギリスやアメリカのように）単身ホームレス・世帯ホームレスという基準ではなく、長期間ホームレス状態にあるのか、それともより最近のホームレスなのかというように期間を基準として線引きがなされている。前者を基準とする場合は監視や立ち退き、管理といった措置が増加しやすい傾向にあったが、後者の場合は受容性が高い対応によって支援の恩恵を受けやすくなっている。男性ホームレスの一般的な住宅と雇用への「再統合」を手助けするために設計された新しいシェルターが普及しつつあるが、そうしたシェルターの供給も受容性が高い対応の一例である。

ここまでの事例から明らかなおと、イギリスやニュージーランド、韓国でのホームレス問題やホームレスへの対応はアメリカのものと同じではない。こうした差異の存在を踏まえれば、ホームレスの地理の微細な差異を解明するためにも、ホームレスに関心を寄せる地理学者らにとってはアメリカ以外にも視野を広げることが急務であると言える。もっと言えばホームレス研究を行う地理学者は先進国以外に目を向けるのがよいだろう。サンパウロ、カイロ、ムンバイ、マニラといった都市においては、ホームレス状況とそれを扱う精神的でしばしば命がけの試みのスケールが新たな局面を迎えている。これらの都市の中には人口の半分以上が危険かつインフォーマルなシェルターで暮らしているところもあり、また何万という子どもたちが路上で暮らし、時に死亡している都市もある（Dos Santos, 2003; Roy, 2003; Davis, 2006; Speak and Tipple, 2006）。開発途上国のホームレス問題に取り組むことが都市研究や開発研究に必要な地理学的想像力を

豊かにする、それを十分理解しているにもかかわらず（Robinson, 2002）地理学者たちは随分と躊躇をしている（Beazley, 2002を参照）。

## 第VI章 差異化、差異、アイデンティティ…そしてエージェンシー

タカハシ（1996）が明示したように、ホームレスへの対応をかたちづくる決定的要素となるのはホームレスの人々自身が有する多様性である。懲罰論的枠組みを基調とする諸研究の最も深刻な足かせの1つはホームレスの人々をひとつの均質でほとんど男女の区別のない集団、すなわち「ホームレスというもの」として扱っていることである。このような還元主義は、ディシプリン内での差異に対する敏感さと様々な大衆を差異化する必要があるという意識の高まりなどを考えると不思議で仕方がない（Ward, 2006）。

今日の文脈においては、人種やジェンダーなどによってホームレスの経験やそれへの対応が複雑にかたちづけられているということは明らかである。例えば子をもつ女性ホームレスへ向けられるより大きな同情をとり上げた研究がある（Baker, 1994; Salomon et al., 1996; Takahashi et al., 2002）。また一方で、依然として大抵のサービスが男性ホームレスを対象とする傾向にあるため、適切な対応を受けることができていないと感じている単身の「社会に受容されていない女性 unaccommodated women」がいるのだが、そのような女性たちが直面するスティグマの増加を研究した研究もある（DeVerteuil, 2003; May et al., 2007）。ホームレス状況の出来を対象とした研究は未だに揺籃期にあり、地理学者はホームレスと男性性の相互関係に関する議論に今のところ貢献できていない（Higate, 2000a; 2000bを参照）。しかしそれは現在では（再び）主要な論点となっており（Takahashi, 1998; DeVerteuil, 2005; Whitzman, 2006を参照）、ホームレス状況にはホームレスの人々の路上での経験、彼／彼女らのサービスへのアクセス、もしくは「ホーム」や「ホームレスというもの」それ自体の構築など様々な側面があるが、これらをかたちづくるジェンダーの役割について今まで以上に注意を払うことが地理学者に求められている（Klodawsky, 2006。ホームレス状況の出来に関する初期の研究についてはRowe and Wolch, 1990を参照）。

ホームレスと人種、またはホームレスと人種と

ジェンダー、これらの相互関係について少なくとも地理学者からはあまり言及がなされていない（地理学以外でのホームレスと人種に関する研究のレビューはHarrison, 1999を参照）。パッサロ Passaro (1996) が主張したように、ホームレスと人種の間にはしばしば次のように理解される。すなわち、ホームレスになる可能性は人種によってはっきりと異なる。しかし、そうであるにもかかわらず、個人がひとたびホームレスとなってしまうと人種は大きな問題ではない、と。パッサロはさらに言う。

マンハッタンにおいて長期にわたりホームレスとなっている人には圧倒的に黒人が多い。なぜなのだろうか？私の答えはこうだ。ホームレス状態は単なる経済的な困窮状態ではなくて、1つの文化的・道徳的身分なのであり……〔ホームレスの〕男性は、女性、家族、社会などといった縛りとは無関係なのだと思う。またそれゆえに彼らは危険で、暴力的で、攻撃的であると考えられている。もし彼らが「非白人」であるならば、レイシズムによってそうした恐怖が肥大化し誇張される。(Passaro, 1996: 1より引用)

この領域で研究を行う地理学者は、人種によってどのようにホームレスというものの構築が生み出されるのか、もしくは人種やエスニシティによって人々のホームレスの経験がどうかたちづくられるのかということ調査するよりは、むしろ環境レイシズムの問題に主眼を置いてきた。例えばホームレス施設の立地に関して、それが（郊外の）白人近隣地区よりもエスニック・マイノリティ地区に立地する可能性が高い原因について調査をしている（Hopper and Baumohl, 1994; Wright, 1997）。他方、研究者たちはホームレスの人々自身の「位置選好 locational preferences」についての調査も始めており、エスニシティによって位置選好を差異化している。その一例として、ロサンゼルス市のシェルターシステムにおける女性ホームレスの動向を対象としたドゥヴェルトウイユ (2001, 2003) の研究がある。そこで彼は、白人女性ホームレスには自らがマイノリティとなる地区を避け、とりわけホームレスの大多数がアフリカ系アメリカ人であるダウントウンを避けるはっきりとした傾向があることを明らかにした。対照的にアフリカ系アメリカ人のホームレスは、ロサンゼルス市のアフリカ系アメリカ人コミュニティの伝統的中心地であるサウスセントラルロサンゼルス近郊、もしくは出身地域で暮らす傾向が高かつ

た。そして研究の中で対象とされた数少ない移民女性（大部分はラテンアメリカ人）はアフリカ系アメリカ人と同様、自身のコミュニティ地区と支援のネットワークに固着し、「救世軍 Salvation Army」のような主流のホームレスサービスを意図的に避けていたのだ（Molina, 2000を参照）。

選好によってホームレスの人々はエージェンシー agency の感覚を取り戻しているのだが、その「選好」（しかしながら選択肢は限定的である）に焦点を当てていることからドゥヴェルトウイユの研究が特に重要であると言える。懲罰論的転回に枠づけられた研究においては、あたかもホームレスの人々があらゆるエージェンシーを失っているかのように描写され、例えば大規模な立ち退きと路上掃討の不運な犠牲者として捉えられた。われわれがこの点を指摘するのは、そのような捉え方こそが近年の反ホームレス措置に対する抵抗の可能性を完全に無視しているのだ、ということを主張するためではない。ただ、抵抗というのは生じたときにはじめて正真正銘の「抵抗」となるのであり、例えば暴動や大規模な占拠（Smith, 1992）、そして反ホームレス法に対する合法的な異議申し立て（Mitchell, 2003）がそれにあたる。その契機は疑いようもなく重要なものであるが、しかし極端に珍しいケースであることも認めない。また、抵抗という実践はほとんどの場合ホームレスの人々ではなく彼／彼女らに代って活動家らによって組織されている（Dear and von Mahs, 1997; Wright, 1997を参照）。

実際、都市からホームレスを締め出そうとする動向への言及をしばしば耳にするが、しかしそうした主張の中で——間接的なかたちであってさえも——ホームレスの人々自身に発言権が与えられることはほとんどない。結局のところわれわれはホームレスたちの境遇についておおよそ何も理解していないのであって、例えば、なぜ、どのようにホームレスになったのか、どれくらいの期間ホームレス状態なのか、ホームレスサービスや広大な都市での経験はどうかということ——黒人なのか白人なのか、若いのか年老いているのか、男性なのか女性なのかといったことさえ——を把握できていないのである（Mohan, 2002）。そのような研究は明らかに対抗のポリティクス oppositional politics によって枠づけられているのだが、次のことを指摘することは許されてしかるべきであろう。すなわち、懲罰論的枠組みの中でなされる記述はホームレスの地理それ自体もしくはホームレス人々に関心があるわけではない。むしろジェントリフィケーションや公共空間法

などへの幅広い批評を打ち立てるための都合のよいネタとしてホームレスの人々を利用することに関心があるのであって、例えばミッチェル自身も「ホームレス…都市における正義のモノサシ〔として〕」などと表現している(2003: 9)。

もしそうであるならば、そのような志向性の何が問題であるのかを問わなければならない。われわれは次の3つの点からこの問いについて考えている。第一に、ホームレス状況の経験——その観察者が、懲罰論の枠組みに依拠する記者者によって示された後退的政策に影響を受けやすいことを自覚的に認識できるか否か、ということも含む——は、ホームレス各人によってかなり異なっている。もし記者者たちの真の関心が公共空間のポリティクス *politics of public space* の改変を模索することにあるのなら、われわれはそうした改変の効果がホームレスによってそれぞれ異なって経験されるということに注意をしなければならない。第二に、上記の差異——ホームレス状態である期間や各人の年齢、人種、ジェンダーなど——がホームレス問題への公的政策の発展にとって不可欠であるため、低廉住宅事業・借家支援パッケージ・更生事業、もしくは様々なホームレスを受け入れるために設計された緊急シェルターの多様な配置のいずれを選択するのかということが重要となる。第三に、ホームレスの人々の差異を認識すること、彼/彼女らへ発言権を付与すること、そして彼/彼女らが都市において「何とかやり過ごし」生き続けるためにとる(多種多様な)手段を認識すること(Ruddick, 1996)、これらを怠っている懲罰論的記述では精力的に他者を非難する——「ホームレスの人々…〔彼/彼女らの〕個性…人間性を否定し」さらにエージェンシーも否定する——行為が繰り返されている(Mitchell, 2003: footnote 21, 158。自身の研究におけるこうした傾向を認め、それを擁護しているものとして footnote 21, 158-159 を参照)。

ホームレスの人々による都市の経験を調査することに関心がある人は確かにいて、彼/彼女らが参照可能な豊かな研究成果——その多くは地理学者によるものである——によって上記の傾向はなお一層の失望を招いている。その豊かな諸研究は、ホームレスの人々自身による都市生活の記述に物語空間を持たせるために民族学(Cloke et al., 2008)、参与観察(Cooper, 2001)、ライフヒストリーへのアプローチ(May, 2000; von Mahs, 2005)、自叙的写真法(Johnsen et al., 2008) などといった幅広い革新的手法を展開している。例えばフォンマース(2005)

は伝記法を用いて回答者の居住の基盤とホームレス状態であった頃を差異化しながら、ドイツの単身ホームレスの経験を調査した。彼は、「通常の」人生を歩んでいる人は「通常でない」(居住が不安定であったりホームレス状態だった過去を持つ)人生を歩んでいる人よりも、懲罰論的研究で描かれるようなハラスメントを経験しやすいということを明らかにしている。しかしこの後者のグループでさえ、規制や取締りの経験を反映させるように言われると主要な関心はハラスメントではなく、低廉住宅の利用や雇用において経験した問題に向けられたということが報告された。

他にも様々な切り口で捉えられ、その詳細が考察されている。研究事例は次の通りである。ホームレスの人々の都市における移動は、居住する人々によって異なる何が都市空間とされるのかという価値観(例えば、「主要な」空間なのかそれともより「周縁的な」空間なのか——「公的」空間か「私的」空間かという単純な区別というより、われわれが見出したより有効性の高い連続性)に取り囲まれていること(Ruddick, 1996; Wardhaugh, 2000)、ホームレスの人々が都市風景の至る所に「ホーム」の空間を再び刻み込もうとしていること(Veness, 1993; Ruddick, 1996; Cooper, 2001)、そして路上で「何とかやり過ごす」ために彼/彼女らが実践する多種多様な行為(安心して眠ることができる空間を見つけ出す、お金を稼ぐ、相互援助のネットワークを利用する、強化される取締りや監視に対処する)(Snow and Anderson, 1993; Lees, 1997; Knowles, 2000)などが考察の対象とされている。こうした研究は、レジスタンス *Resistance* という劇的な契機の強調や近年の反ホームレス計画への対抗を目的として活動家らによって案出される戦略よりは、ホームレスの人々が都市に空間を造り出すために自ら画策する数々の多様で創造的な手法に注目している(ホームレス都市に対するこのような「理性的な」解釈からは離れ、代わりにホームレスの感情的で実行力のある側面を強調する研究については Cloke et al., 2008 を参照)。

上記の研究ではホームレスの人々が犠牲者としてではなく、非常に頑強であるように記述され、彼/彼女らには路上から「一掃する」計画にも立ち向かうことのできるすばらしい能力があるように描かれている。この点に関してダンアール Duneier は次のように論じている。

多くの政治家は、路上で働く評判の悪い人たちの生活を困窮させる法律を可決さえすれば、そうした人たちがたちまち消えていなくなるだろう、などと考えているがそれは誤りである…。〔しかし〕確かに、もしそれが強く望まれてもしたら、沿道で働き暮らす人々はそれを続けること困難となるだろう。「真つ当な暮らし」をつくりだそうとするそうした決定は、6番通の男性や女性たちがそうするのと同じように、路上で暮らす人々の創造性・競争心・文化的知性を存続させ、それらがうまく機能するように仕向けるだろう。(Duneier, 1999: 312より引用)

## 第七章 結論

最近10年ほどの間に地理学者によるホームレス研究が著しく急増している。それを牽引しているのは少数の主要な研究者であるが、その研究の多くはホームレスをめぐる問いとジェントリフィケーション・都市の再編成・公共空間のポリティクスといった幅広いテーマとを結びつけようという意向のもとで枠づけがなされてきた。こうした成果は非常に有用であり、ホームレスに関する議論を主流の地理学的研究へと持ち込むことに寄与してきた。

ホームレス問題への関心が高まりつつあることは歓迎すべきことであるが、一方でそうした研究に対して近年表明されている懸念についても共有しなければならない (Laurenson and Collins, 2007; Murphy, 2009)。つまりそれは、ホームレス研究の大半が狭い視野を保ったままアメリカ製の知的尺度から抜け出せておらず、また近年の都市社会政策にみられる懲罰的措置の厳格化にばかり目を向けてしまっているということである。ここ10年の間、ホームレスの人々を圧迫する一層厳格化された広範な懲罰的措置が講じられており、そうした動向を確認することができる都市の数が北米や西欧、そしてそれ以外の地域においても増加しているということは明らかである。しかし一方で、近年のホームレスへの対応が「一様に冷淡」(Laurenson and Collins, 2007: 650)であるわけではないことも同様に明らかである。つまり、ホームレス状況の範囲や形態が場所によって異なるように、われわれはホームレス問題への対応に一定の幅があること、すなわち目に見えて懲罰的な措置からより受容性の高い対応、そして両者の中間に位置する対応の存在を確認することができるのである。そしてホームレス問題への地理的に多様な対応が現代欧米都市に遍在するホームレス空

間の急増や不可視化につながっているため、近年のホームレスの地理は「崩壊」からはかけ離れて、より多様かつ複雑なものとなっているのだ。

別言すれば、ホームレスやそれへの対応に関する複雑で多様な地理が存在しているということである。しかしその地理は、地理学者による近年のホームレス研究においてしばしば等閑視されてきた。それゆえにわれわれは「懲罰的措置の厳格化」への批判に留まらず、より多様な対応を概念化する手法——ポバティ・マネジメント——の輪郭を描いてきた。そしてまた、ホームレスを生み出すこととホームレスへの対応の地理的多様性を明らかにし、この地理的多様性への適切な理解を進展させるための新しい枠組みも展開させてきた。

また次のことも主張しようとした。もし本当の関心が——公共空間のポリティクスや「報復／ポスト正義の」都市よりも——ホームレスの地理やホームレスの人々が求めるものにあるのならば、研究者たちはホームレスの地理の当事者、例えば都市管理者、福祉に関わる自治体組織、ボランティアセクター、ホームレスの人々自身に直接関わっていくことが求められる。われわれは、そうした当事者らが認識するホームレス都市についての記述を構築することによってはじめてホームレスの地理の確立に手をつけられるのかもしれない。これは言うまでもなく、多くの都市で卓越している後退的政策に注意を払う記述を構築するということであるが、同時に以下に示すスペース space・信頼 credence・発言権 voiceを与えるものでもある。すなわち、ホームレスへの最も確かな対応をめぐるって繰り広げられる都市管理者、公共政策当局、福祉機関によるせめぎ合いにスペースを提供する。またホームレスの人々の要望に応えるために何千ものボランティアセクターとボランティアが尽力しているが、そうした組織や個人の意志への信頼を喚起する。そしてさらにホームレスの人々の発言権を取り戻す。発言権を取り戻すことによってわれわれはホームレスの経験をよりよく理解でき、彼／彼女らの希望や願望を擁護することが可能となる。そうしてわれわれは、近年の懲罰的措置の増大が決して不幸なことではなく希望のための根拠を与えてくれるものだと考えることもできるのかもしれない。その希望とは、「明瞭で強力」という意味では「報復主義者」的精神にも見られるが、そうではなくホームレスの人々に対する依然として“明瞭で強力”なケアの衝動への希望。そして、地理学者たちが非難ばかりを続けるのではなく、ホームレス問題に取り組む上での最も適切な方法について自ら

の提案を(既に始めている研究者のように)実際に組み立て始めるかもしれないという希望である。

## References

- Alcock, P. and Craig, G., editors 2001. *International social policy: welfare regimes in the developed world*. Basingstoke: Palgrave.
- Arapoglou, V.P. 2004. The governance of homelessness in the European South: spatial and institutional contexts of philanthropy in Athens. *Urban Studies* 41, 621-39.
- Baker, S. 1994. Gender, ethnicity, and homelessness. *American Behavioral Scientist* 37, 476-504.
- Beazley, H. 2002. 'Vagrants wearing make-up': negotiating spaces of the streets of Yogyakarta, Indonesia. *Urban Studies* 39, 1665-83.
- Blomley, N. 2006. Editorial: Homelessness and the delusions of property. *Transactions of the Institute of British Geographers NS* 31, 3-5.
- 2007a. How to turn a beggar into a bus stop: law, traffic and the 'function of the place'. *Urban Studies* 44, 1697-712.
- 2007b. Legal geographies - Kelo, contradiction, and capitalism. *Urban Geography* 28, 198-205.
- Blomley, N. and Klodawsky, F. 2007a. Rights, space and homelessness 1. Session convened at the annual conference of the Association of American Geographers, San Francisco, April.
- 2007b. Rights, space and homelessness 2. Session convened at the annual conference of the Association of American Geographers, San Francisco, April.
- 2007c. Rights, space and homelessness 3. Session convened at the annual conference of the Association of American Geographers, San Francisco, April.
- Brenner, N. 2004a. Urban governance and the production of new state spaces in western Europe, 1960-2000. *Review of International Political Economy* 11, 447-88.
- 2004b. Stereotypes, archetypes and prototypes: three uses of superlatives in contemporary urban studies. *City and Community* 3, 205-18.
- Brinegar, S. 2003. The social construction of homeless shelters in the Phoenix area. *Urban Geography* 24, 61-74.
- Burt, M., Aron, L., Lee, E. and Valentine, J. 2001. *Helping America's homeless: emergency shelter or affordable housing*. Washington, DC: The Urban Institute Press.
- Cameron, A. 2007. Geographies of welfare and exclusion: reconstituting the 'public'. *Progress in Human Geography* 31, 519-26.
- Cloke, P., Johnsen, S. and May, J. 2005. Exploring ethos? Discourses of charity in the provision of emergency services for homeless people. *Environment and Planning A* 37, 385-402.
- 2007a. Ethical citizenship? Volunteers and the ethics of providing services for homeless people. *Geoforum* 38, 1089-101.
- 2007b. The periphery of care: emergency services for homeless people in rural areas. *Journal of Rural Studies* 23, 387-401.
- Cloke, P. May, J. and Johnsen, S. 2008. Performativity and affect in the homeless city. *Environment and Planning: Society and Space* 26, 241-63.
- Cloke, P., Milbourne, P. and Widdowfield, R. 2000. Homelessness and rurality: 'out of place' in purified space? *Environment and Planning D: Society and Space* 18, 715-35.
- Coleman, R. 2004. Images from a neoliberal city: the state, surveillance and social control. *Criminology* 12, 21-42.
- Collins, D. and Blomley, N. 2003. Private needs and public space: politics, poverty, and anti-panhandling by-laws in Canadian cities. In Law Commission of Canada, editor, *New perspectives on the public-private divide*, Vancouver: University of British Columbia, 40-68.
- Cooper, R. 2001. The intersection of space and homelessness in Central Auckland. Unpublished MA thesis, Department of Geography, University of Auckland, NZ.
- Cowan, D. 2006. Adjudicating the implementation of homeless law: the promise of socio-legal studies. *Housing Studies* 21, 381-400.
- Cresswell, T. 1996. *In place/out of place: Geography, ideology and transgression*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Daly, M. 1999. Regimes of social policy in Europe and the patterning of homelessness. In Avramov, D., editor, *Coping with homelessness: issues to be tackled and best practices in Europe*, Aldershot: Ashgate, 309-30.
- Dangschat, J. 1997. Local political reactions on the surplus population of Hamburg. Paper presented at Homelessness and Urban Restructuring: the Americanization of the European City? The Contradictory Geography of Socio-spatial Injustices in Global (izing) Cities, John F. Kennedy Institute, University of Berlin, October.
- Datta, A. 2005. 'Homed' in Arizona: the architecture of emergency shelters. *Urban Geography* 26, 536-57.
- Davis, M. 1990. *City of quartz*. London: Vintage. マイク・デイヴィス著, 村山敏勝, 日比野啓訳(2001)『要塞都市LA』青土社.
- 2006. *Planet of slums*. London: Verso. マイク・デイヴィス著, 酒井隆史監訳, 篠原雅武, 丸山里美訳(2010)『スラムの惑星: 都市貧困のグローバル化』明石書店.
- Deacon, A. 2000. Learning from the US? The influence of American ideas upon 'new labour' thinking on welfare reform. *Policy and Politics* 28, 5-18.



- Dean, H., editor 1999. *Begging questions: street level economic activity and social policy*. London: Policy Press.
- Dear, M. and von Mahs, J. 1997. Housing for the homeless, by the homeless, and of the homeless. In Ellin, N., editor, *The architecture of fear*, Princeton, NJ: Princeton University Press, 187-200.
- DelCasino, V. and Jocoy, C. 2008. Neoliberal subjectivities, the 'new' homelessness, and struggles over spaces of/in the city. *Antipode* 40, 192-99.
- DeVerteuil, G. 2001. *Welfare reform and welfare neighborhoods: institutional and individual perspectives*. Unpublished PhD thesis, Department of Geography, University of Southern California.
- 2003. Homeless mobility, institutional settings, and the new poverty management. *Environment and Planning A* 35, 361-79.
- 2004. Systematic inquiry into barriers to researcher access: evidence from a homeless shelter. *The Professional Geographer* 56, 372-80.
- 2005. The relationship between government assistance and housing outcomes among extremely low-income individuals: a qualitative inquiry in Los Angeles. *Housing Studies* 20, 383-99.
- 2006. The local state and homeless shelters: beyond revanchism? *Cities* 23, 109-20.
- Dordick, G. 1997. *Something left to lose: personal relations and survival among New York's homeless*. Philadelphia, PA: Temple University Press.
- Dos Santos, C. 2003. *Cities of plastic and cardboard: the informal habitat of homeless people in Sao Paulo, Los Angeles and Tokyo*. Professorship thesis, University of São Paulo.
- Duneier, M. 1999. *Sidewalk*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
- Esping-Andersen, G. 1990. *The three worlds of welfare capitalism*. Cambridge: Polity Press. エスピン＝アンデルセン著, 岡沢憲英, 宮本太郎監訳(2001)『福祉資本主義の三つの世界——比較福祉国家の理論と動態』ミネルヴァ書房.
- Evans, L. 2007. Housing justice welcomes London Councils' decision to drop soup run ban. Retrieved 25 March 2009 from <http://www.housingjustice.org.uk/forum/viewtopic.php?p=56&sid=a44162dc7121756b56fcf869f03c549a>
- Fitzpatrick, S. 2001. The links between begging and rough sleeping: a question of legitimacy? *Housing Studies* 16, 549-68.
- Fopp, R. 2002. Increasing the potential for gaze, surveillance and normalization: the transformation of an Australian policy for people who are homeless. *Surveillance and Society* 1, 48-65.
- Gaber, S.L. 1996. From NIMBY to Fair Share: the development of New York City's municipal shelter siting policies, 1980-1990. *Urban Geography* 17, 294-316.
- Glasser, I. 1994. *Homelessness in global perspective*. Boston, MA: G.K. Hall and Company.
- Harrison, M. 1999. Theorizing homelessness and 'race.' In Kennett, P. and Marsh, A., editors, *Homelessness: exploring the new terrain*, Bristol: Policy Press, 101-20.
- Harvey, D. 2005. *A brief history of neoliberalism*. Oxford: Oxford University Press. デヴィッド・ハーヴェイ著, 渡辺治監訳, 森田成也, 木下ちがや, 大屋定晴, 中村好孝訳(2007)『新自由主義——その歴史の展開と現在』作品社.
- Herbert, S. and Brown, E. 2006. Conceptions of space and crime in the punitive neoliberal city. *Antipode* 38, 4, 755-77.
- Hetherington, K. 2001. Moderns as ancients: time, space and the discourse of Improvement. In May, J. and Thrift, N., editors, *TimeSpace: geographies of temporality*, London: Routledge, 49-72.
- Higate, P. 2000a. Ex-servicemen on the road: travel and homelessness. *The Sociological Review* 48, 331-48.
- 2000b. Tough bodies and rough sleeping: embodying homelessness among ex-servicemen. *Housing, Theory and Society* 17, 97-108.
- Hoch, C. 1991. The spatial organization of the urban homeless: a case study of Chicago. *Urban Geography* 12, 137-54.
- Hopper, K. and Baumohl, J. 1994. Held in abeyance: rethinking homelessness and advocacy. *American Behavioral Scientist* 37, 522-52.
- Hubbard, P. 2004. Revenge and injustice in the neoliberal city: uncovering masculinist agendas. *Antipode* 36, 665-86.
- Huber, E. and Stephens, J. 2001. *Development and crisis of the welfare state: parties and policies in global markets*. Chicago: Chicago University Press.
- Inter-University Consortium Against Homelessness 2007. *A reality-based approach to ending homelessness in Los Angeles*. Los Angeles: Inter-University Consortium Against Homelessness.
- Johnsen, S. and Fitzpatrick, S. 2007. *The impact of enforcement on street users in England*. Plymouth: The Policy Press.
- Johnsen, S., Cloke, P. and May, J. 2005a. Day centres for homeless people: spaces of care or fear? *Social and Cultural Geography* 6, 787-811.
- 2005b. Transitory spaces of care: serving homeless people on the street. *Health and Place* 11, 323-36.
- Johnsen, S., May, J. and Cloke, P. 2008. Imag(in)ing homeless places: using auto-photography to (re) examine the geographies of homelessness. *Area* 40, 194-207.
- Katz, C. 2001. Hiding the target: social reproduction in the privatized urban environment. In Minca, C., editor, *Postmodern geography: theory and praxis*, Oxford: Blackwell, 93-110.

- Klodawsky, F. 2006. Landscapes on the margins: gender and homelessness. *Gender, Place and Culture* 13, 365-81.
- Knowles, C. 2000. *Bedlam on the streets*. London: Routledge.
- Larner, W. 2000. Neoliberalism: policy, ideology, governmentality. *Studies in Political Economy* 63, 5-26.
- Laurenson, P. and Collins, D. 2006. Towards inclusion: local government, public space and homelessness in New Zealand. *New Zealand Geographer* 62, 185-95.
- 2007. Beyond punitive regulation? New Zealand local governments' responses to homelessness. *Antipode* 39, 649-67.
- Law, R. 2001. 'Not in my city': local governments and homelessness policies in the Los Angeles Metropolitan Region. *Environment and Planning C* 19, 791-815.
- Laws, G. 1992. Emergency shelter networks in an urban area: serving the homeless in Metropolitan Toronto. *Urban Geography* 13, 99-126.
- Lee, B. and Farrell, C. 2003. Buddy, can you spare a dime? Homelessness, panhandling, and the public. *Urban Affairs Review* 38, 299-324.
- Lees, L. 1997. Ageographia, heterotopia and Vancouver's new public library. *Environment and Planning D: Society and Space* 15, 321-47.
- 2005. The ambivalence of diversity and the politics of urban renaissance: the case of youth in downtown Portland, Maine. *International Journal of Urban and Regional Research* 27, 613-34.
- Leitner, H. 1992. Urban geography: responding to new challenges. *Progress in Human Geography* 16, 105-18.
- Link, B.G., Schwartz, S., Moore, R., Phelan, J., Struening, E., Stueve, A. and Colten, M.E. 1995. Public knowledge, attitudes, and beliefs about homeless people: evidence for compassion fatigue? *American Journal of Community Psychology* 23, 533-55.
- Lobao, E. and Murray, A. 2005. Exploratory analysis of the homeless shelter system in Columbus, Ohio. *Geografiska Annaler B* 87, 1, 61-73.
- MacLeod, G. 2002. From urban entrepreneurialism to a 'revanchist city'? On the spatial injustices of Glasgow's renaissance. *Antipode* 34, 602-24.
- Mair, A. 1986. The homeless and the post-industrial city. *Political Geography Quarterly* 5, 351-68.
- Marr, M. 1997. Maintaining autonomy: the plight of the American Skid Row and Japanese Yoseba. *Journal of Social Distress and the Homeless* 6, 229-50.
- Mathieu, A. 1993. The medicalization of homelessness and the theatre of repression. *Medical Anthropology Quarterly* 7, 170-84.
- May, J. 2000. Of nomads and vagrants: single homelessness and narratives of home as place. *Environment and Planning D: Society and Space* 18, 737-59.
- 2003. The view from the streets: geographies of homelessness in the British newspaper press. In Blunt, A., Grufudd, P., May, J., Ogborn, M. and Pinder, D. editors, *Practising cultural geography*, London: Arnold, 23-38.
- 2004. 12 things wrong with the revanchist city thesis. In *Beyond the Revanchist City*, Annual Meeting of the Association of American Geographers, Philadelphia, March.
- 2008. Homelessness. In Kitchin, R. and Thrift, N., editors, *International encyclopaedia of human geography*, London: Elsevier.
- May, J., Johnsen, S. and Cloke, P. 2005. Re-phasing neo-liberalism: New Labour and Britain's crisis of street homelessness. *Antipode* 37, 703-30.
- 2006. Shelter at the margins: New Labour and the changing state of emergency accommodation for single homeless people in Britain. *Policy and Politics* 34, 711-30.
- 2007. Alternative cartographies of homelessness: rendering visible British women's experiences of 'visible' homelessness. *Gender, Place and Culture* 14, 121-40.
- Merrifield, A. 2000. The dialectics of dystopia: disorder and zero tolerance in the city. *International Journal of Urban and Regional Research* 24, 473-89.
- Metraux, S. 1999. Waiting for the wrecking ball: Skid Row in postindustrial Philadelphia. *Journal of Urban History* 25, 690-715.
- Milligan, C. and Fyfe, N. 2004. Putting the voluntary sector in its place: geographical perspectives on voluntary activity and social welfare in Glasgow. *Journal of Social Policy* 33, 73-93.
- Minnery, J. and Greenhalgh, E. 2007. Approaches to Homelessness Policy in Europe, the United States, and Australia. *Journal of Social Issues* 63, 641-55.
- Mitchell, D. 1997. The annihilation of space by law: the roots and implications of anti-homeless laws in the United States. *Antipode* 29, 303-36.
- 1998a. Anti-homeless laws and public space I: Begging and the First Amendment. *Urban Geography* 19, 6-11.
- 1998b. Anti-homeless laws and public space II: further constitutional issues. *Urban Geography* 19, 98-104.
- 2001. Postmodern geographical praxis? The postmodern impulse and the war against homeless people in the 'post-justice' city. In Minca, C., editor, *Postmodern geography: theory and praxis*, Oxford: Blackwell, 57-92.
- 2003. *The right to the city: social justice and the fight for public space*. London: Guilford.
- 2005. The S.U.V. model of citizenship, floating bubbles, buffer zones, and the rise of the 'purely atomic' individual. *Political Geography* 24, 77-100.
- Mohan, J. 2002. Geographies of welfare and social exclusion: dimensions, consequences and methods. *Progress*

- in *Human Geography* 26, 65-75.
- Molina, E. 2000. Informal non-kin networks among homeless Latino and African American men: form and functions. *American Behavioral Scientist* 43, 663-85.
- Murphy, S. 2009. 'Compassionate' strategies of managing homelessness: post-revanchist geographies in San Francisco. *Antipode* 41, 305-25.
- Neale, J. 2001. Homelessness among drug users: a double jeopardy explored. *International Journal of Drug Policy* 12, 353-69.
- Passaro, J. 1996. *The unequal homeless: men on the street, women in their place*. New York: Routledge.
- Peck, J. 2001. Neo-liberalizing states: thin policies/hard edges. *Progress in Human Geography* 25, 445-55.
- Piven, F.F. and Cloward, R. 1993. *Regulating the poor: the functions of public welfare (second edition)*. New York: Vintage Books.
- Robinson, J. 2002. Global and world cities: a view from off the map. *International Journal of Urban and Regional Research* 26, 531-54.
- Rowe, S. and Wolch, J. 1990. Social networks in time and space: homeless women in Skid Row, Los Angeles. *Annals of the Association of American Geographers*, 80, 184-205.
- Roy, A. 2003. *City requiem, Calcutta: gender and the politics of poverty*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Ruddick, S. 1996. *Young and homeless in Hollywood: mapping social identities*. New York: Routledge.
- Salomon, A., Bassuk, S. and Brooks, M. 1996. Patterns of welfare use among poor and homeless women. *American Journal of Orthopsychiatry* 66, 510-25.
- Slater, T. 2004. North American gentrification? Revanchist and emancipatory perspectives explored. *Environment and Planning A* 36, 1191-213.
- Smith, N. 1992. New city, new frontier: the Lower East Side as Wild West. In Sorkin, M., editor, *Variations on a theme park: the new American city and the end of public space*, New York: Hill and Wang, 61-93.
- 1996a. *The new urban frontier: gentrification and the revanchist city*. London: Routledge. ニール・スミス著, 原口剛訳(2014)『ジェントリフィケーションと報復都市——新たななる都市のフロンティア——』ミネルヴァ書房.
- 1996b. Social justice and the new American urbanism: the revanchist city. In Merrifield, A. and Swyngedouw, E., editors, *The urbanization of injustice*, London: Lawrence and Wishart, 117-36.
- 1998. Giuliani time: the revanchist 1990s. *Social Texts* 57(18), 1-20.
- 2001. Global social cleansing: postliberal revanchism and the export of zero tolerance. *Social Justice* 28 (3), 68-74.
- Snow, D. and Anderson, L. 1993. *Down on their luck: a study of homeless street people*. Los Angeles, CA: University of California Press.
- Snow, D. and Mulcahy, M. 2001. Space, politics, and the survival strategies of the homeless. *American Behavioral Scientist* 45, 149-69.
- Song, J. 2006. Historicization of homeless spaces: the Seoul train station square and the house of freedom. *Anthropological Quarterly* 79, 193-223.
- Sorkin, M., editor 1992. *Variations of a theme park: the new American city and the end of public space*. New York: Hill and Wang.
- Speak, S. and Tipple, G. 2006. Perceptions, persecution and pity: the limitations of interventions for homelessness in developing countries. *International Journal of Urban and Regional Research* 30, 172-88.
- Staeheli, L. and Mitchell, D. 2007. Locating the public in research and practice. *Progress in Human Geography* 31, 792-811.
- Swanson, K. 2007. Revanchist urbanism heads south: the regulation of indigenous beggars and street vendors in Ecuador. *Antipode* 39, 708-28.
- Takahashi, L. 1996. A decade of understanding homelessness in the USA: from characterization to representation. *Progress in Human Geography* 20, 291-31.
- 1997. The socio-spatial stigmatization of homelessness and HIV/AIDS: toward an explanation of the NIMBY syndrome. *Social Science and Medicine* 45, 903-14.
- 1998. Homelessness, AIDS, and stigmatization: the NIMBY syndrome in the United States at the end of the twentieth century. Oxford: Clarendon Press.
- Takahashi, L., McElroy, J. and Rowe, S. 2002. The socio-spatial stigmatization of homeless women with children. *Urban Geography* 23, 3102-22.
- Uitermark, J. and Duyvendak, J. 2008. Civilizing the city: populism and revanchist urbanism in Rotterdam. *Urban Studies* 45, 1485-503.
- Veness, A.R. 1993. Neither homed nor homeless: contested definitions and the personal worlds of the poor. *Political Geography* 12, 319-40.
- Veness, I. 1994. Designer shelters as models and makers of home: new responses to homelessness in urban America. *Urban Geography* 15, 150-67.
- von Mahs, J. 2005. The socio-spatial exclusion of homeless people in Germany and the United States. Special issue on homelessness and social exclusion. *American Behavioral Scientist* 48, 928-60.
- Wacquant, L. 1999. Urban marginality in the coming millennium. *Urban Studies* 36, 1639-47.
- Ward, K. 2006. Public intellectuals, geography, its representations, and its publics. *Geoforum* 38, 1058-64.
- Wardhaugh, J. 2000. *Sub City: young people, homelessness*

- and crime. London: Ashgate.
- Whitzman, C. 2006. At the intersections of invisibilities: Canadian women, homelessness and health outside the 'big city'. *Gender, Place and Culture* 13, 185-95.
- Williams, J.C. 1996. Geography of the homeless shelter: staff surveillance and resident resistance. *Urban Anthropology* 25, 75-113.
- Wolch, J. 1996. From global to local: the rise of homelessness in Los Angeles during the 1980s. In Scott, A. and Soja, E., editors, *The city*, Berkeley, CA: University of California Press, 390-25.
- 1997. Homelessness and welfare reform. Paper presented at Homelessness and Urban Restructuring: the Americanization of the European City? The Contradictory Geography of Socio-spatial Injustices in Global (izing) Cities, John F. Kennedy Institute, University of Berlin, October.
- 2008. Intransigent LA. *Geoforum* 39, 543-45.
- Wolch, J. and Dear, M. 1993. *Landscapes of despair: from deinstitutionalization to homelessness*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Wolch, J. and DeVerteuil, G. 2001. Landscapes of the new poverty management. In May, J. and Thrift, N., editors, *TimeSpace*, London: Routledge, 149-68.
- Wright, T. 1997. *Out of place: homeless mobilizations, subcities, and contested landscapes*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Wyly, E. and Hammel, D. 2005. Mapping neoliberal American urbanism. In Atkinson, R. and Bridge, G., editors, *Gentrification in a global context: the new urban colonialism*, London: Routledge, 18-38.
- Zukin, S. 1995. *The cultures of cities*. New York: Blackwell.

## 謝辞

翻訳を進めるにあたり水内俊雄教授をはじめとして、ヒェラルド・コルナトウスキさん、ヨハネス・キーナーさん、全ウンフィさん、川口夏希さん、エリオット・コンティさんから大変丁寧なご助言・ご指導を賜りました。不慣れなこともあり長期にわたっての翻訳作業となりましたが、皆様のお力添えがなければとても完訳まで至ることはできませんでした。皆様への感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。